次号 今年の目玉になる ニュードライバー「ステルス2&パラダイム、超最速試打テスト」は1月24日(火)発売です

人生を変えた2つのホールインワンストーリー

ニュージーランドとオーストラリアで価値あるホールインワンが誕生した。

まずはニュージーランドのロトルアGCで、ひと組の夫婦が実現した奇跡のエースから。年明けのある日、スティーブとケイコのカップルはメンバーコースに初打ちへ行った。6番パー3にさしかかり、まずは夫がティーショット。

「本当に素晴らしいショットだったわ。打球はピンに向かって飛び、見る見るうちにカップに吸い込まれたの。まさに奇跡！」と妻ケイコさん。興奮冷めやらないまま彼女も続けてティーショットを放った。

すると打球は空高く舞い上がり、夫婦の視界から一瞬消えた。次の瞬間グリーンをとらえた球はピンに向かって転がりカップイン。

「彼女がいかに負けず嫌いかよくわかった。僕がホールインワンしたから負けじと頑張ったんだね」とスティーブさん。夫婦同ホールでのエースはギネス級だ。

一方、オーストラリアでは「ザ・ペニンシュラサザビーズ・ポートシープロアマ」で奇跡が起きた。賞金5万ドル（約660万円）を48人のゴルファーが奪い合う大会で元プロのダニエル・ベックマンが放った一打が賞金総額の倍の価値になったのだ。

それはガンを発症し、一時はプロを断念しかけた彼にとって生涯ナンバー1のショット。7番パー3で放った6番アイアンのショットはドロー軌道を描き、ピン手前2メートルに着弾すると、スルスルと転がりカップインしたではないか！

「そのホールに賞金が懸かっているのは知らなかった。入ったのは見えなかったけれど、同じ組の人がおめでとうとハグしてくれて10万ドル（1320万円）ゲットだよ、と教えてくれた」。プロを断念した男は「生死の狭間を彷徨った自分にとって、ゴルフのスコアが悪くても生死には関係ない。そう思ったらプロゴルファーも悪くない」とプロに再挑戦することを決意した。

ホールインワンで人生が変わることもある。

駅、空港、街角でのストリートピアノは世界中で楽しまれているが、ゴルフ場にもそれがお目見えした。

兵庫県にある千刈CCでは、レストランにグランドピアノを設置。会員が自由に弾くことができ、メンバーシップゴルフ場としての雰囲気を醸している。

このピアノは会員からの寄贈という。1984年に米国へゴルフ場視察に出かけた会員がロサンゼルスにあるリビエラCCを訪れた際、クラブハウスにあるピアノをメンバーたちが演奏しているのを見て感銘を受け、娘さんのピアノを寄贈したという。

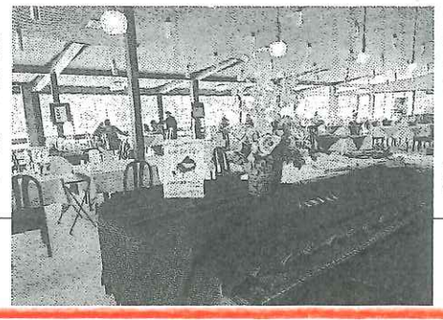
それ以来、ゴルフ場の記念日にプロのピアニストを呼んで弾いてもらったり、会員たちの演奏会などを開いたりしていたが、それも年に数回もないほどだった。

『それならば』ということで、街角ピアノならぬ〝千刈レストランピアノ〟を提案したのは会員・常務理事の津田文夫氏だった。

「〝メンバーシップのありかた〟という点からのご提案でした。ランチのとき、仲間が弾いていれば会話が弾むし、盛り上がります。というわけで、眠っていたピアノを調律し直して目覚めさせたわけです」とは同CC運営、千刈興産常務の池戸秀行氏。

街角でのストリートピアノ発祥はイギリスのバーミンガム市。アーティストのルーク・ジェラシー氏のアートプロジェクトの一環で装飾したアートピアノを15台設置したところ、多くの市民が一期一会の演奏を楽しみはじめ、今や世界の60都市に広まっている。

レストランピアノを設置した同CCは関西学院大学が経営母体で、1965年に開場した。学校法人がゴルフ場を経営する大義名分は、同大学がキリスト教をバックボーンにしており、国際的な賓客を迎える社交施設としてゴルフ場が必要、国際人教育にも役立つというものだった。

会員は当然、同大学関係者が多い。このレストランピアノの設置で会員間の親睦はますます深まるに違いない。

"街角ピアノ"がゴルフ場に出現！親睦に一役 千刈CC